

## コロナ禍と俳句

大野 鶴士

新しい年を迎える。年末年始もオミクロン株による市中感染拡大により、先行きは不透明です。しかし歴史をふり返れば、こうした不安はいつの世も身近にあったのかもしれません。

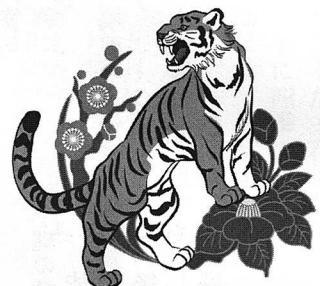
年末のこと、ある医療従事者と話していく、感染しないためには、いつ、どこで、誰とという行動上の三つのポイントがあるという話になりました。当然と言えば当然の内容ですが、俳句のことを思い浮かべたのです。実は『縮み志向の日本人』などの著書のある李御寧(イーオリヨン)が、『俳句で日本を読む』において芭蕉の「枯枝に鳥のとまりけり秋の暮」を例に、俳句は時(秋の暮)と場(枯枝)と物(鳥)とが有機的な関係の三角形構造をなしていると考察しています。

また俳句の親である連句についても、芭蕉門人の支考は付句の方法として、時間と空間(場所)と人間の三本の軸を設けており、その視点は医学における疫学の研究にも通じると指摘されています。叡智につながる俳句との関わりが期待されます。

# 俳人協会岐阜県支部会報

第38号

発行者 大野 鶴士  
発行所 俳人協会  
岐阜県支部事務局  
〒500-8211 岐阜市日野東8-8-3  
横田 義男 方  
TEL・FAX 058-247-6552  
振替口座 00870-9-77529



## 去年今年を詠む

誰も来ぬ二日の餅を焼きにけり 佐藤をさむ  
七草粥知らぬ名の草まじりけり

祖國追はれ異国を追はる去年今年 辻 恵美子  
難民のキャンプの同じ初日影

鏡びらきして本陣をひらきけり 岬 雪夫  
東京湾見おろし包丁始かな

肥後守とて一刀ぞ淑氣満つ 宮川 典夫  
去年今年ウイルスにある進化論

第三の目を養生の去年今年 今津 大天  
初日の出歩く明鏡明るうす

地球こそ終の栖ぞ初御空 宮川 典夫  
白檀の香炷き読書始かな

礼をしてくぐる鳥居や大旦 萩原 正三  
頭より体を使ひ歌留多とり

寒満月連山息を整へよ 富田 澄江  
雪吊の松にあうんの縄の張り

初春の岐阜城金に輝けり 小野木武守  
今朝の春一刀彫の虎飾る

小瀬千恵子

藤田真木子

荻原 正三

大野 鶴士

大天

宮川 典夫

雪夫

辻 恵美子

瀬尾 千草

長野美代子

瀬尾 千草

柏手を子らに合はせて初詣

透 乙美

御降りの溶けていよいよ松青し

渡辺 純枝

最後まで捲つてみたき初暦

加藤 忠美

初日記者ゆる記録とせぬ決意

後藤 和朗

元旦やみんな揃うてありがたし  
御降りに濡る馬籠の石畳

マスクして御慶の言葉うやむやに 矢田 邦子

洋楽を琴が奏でる二日かな 足立 賢治

喰積のこころもとなき嵩となり

二日はや商談電話の虚笑ひ

寅の芽のはや立つてゐる岬村 渡辺 純枝

新元年はやも去年となりたり夢綴る

松尾をさむ

産土の太き神木初御空 森崎 義道

七種や子供太鼓の撥跳ねる

ブランチの後の珈琲去年今年 濱尾 千草

花眼にて「ミチクサ先生」読始

隣人と玄関先の御慶かな 小森 広司

受話器ごとお辞儀してゐる初電話

除夜の鐘かき消すほどの風となり 横田 義男

塗椀に餅行儀よく大旦 寺田 好子

古民家の格子に搖るる餅の花 富田 澄江

連ね千す鱈は喉元貫かれ

年用意包丁研ぎに始まりぬ 富田 澄江

創業を知る神棚や初灯

招福の軸そのままに去年今年 小野木武守

岳人の頬に紅さす初明り

洋楽を琴が奏でる二日かな 足立 賢治

喰積のこころもとなき嵩となり

二日はや商談電話の虚笑ひ

寅の芽のはや立つてゐる岬村 渡辺 純枝

新元年はやも去年となりたり夢綴る

松尾をさむ

産土の太き神木初御空 森崎 義道

七種や子供太鼓の撥跳ねる

ブランチの後の珈琲去年今年 濱尾 千草

花眼にて「ミチクサ先生」読始

隣人と玄関先の御慶かな 小森 広司

受話器ごとお辞儀してゐる初電話

除夜の鐘かき消すほどの風となり 横田 義男

塗椀に餅行儀よく大旦 寺田 好子

古民家の格子に搖るる餅の花 富田 澄江

連ね千す鱈は喉元貫かれ

年用意包丁研ぎに始まりぬ 富田 澄江

創業を知る神棚や初灯

招福の軸そのままに去年今年 小野木武守

岳人の頬に紅さす初明り

洋楽を琴が奏でる二日かな 足立 賢治

喰積のこころもとなき嵩となり

二日はや商談電話の虚笑ひ

寅の芽のはや立つてゐる岬村 渡辺 純枝

新元年はやも去年となりたり夢綴る

松尾をさむ

産土の太き神木初御空 森崎 義道

七種や子供太鼓の撥跳ねる

ブランチの後の珈琲去年今年 濱尾 千草

花眼にて「ミチクサ先生」読始

隣人と玄関先の御慶かな 小森 広司

受話器ごとお辞儀してゐる初電話

除夜の鐘かき消すほどの風となり 横田 義男

塗椀に餅行儀よく大旦 寺田 好子

古民家の格子に搖るる餅の花 富田 澄江

連ね千す鱈は喉元貫かれ

年用意包丁研ぎに始まりぬ 富田 澄江

創業を知る神棚や初灯

招福の軸そのままに去年今年 小野木武守

岳人の頬に紅さす初明り

洋楽を琴が奏でる二日かな 足立 賢治

喰積のこころもとなき嵩となり

二日はや商談電話の虚笑ひ

寅の芽のはや立つてゐる岬村 渡辺 純枝

新元年はやも去年となりたり夢綴る

松尾をさむ

産土の太き神木初御空 森崎 義道

七種や子供太鼓の撥跳ねる

ブランチの後の珈琲去年今年 濱尾 千草

花眼にて「ミチクサ先生」読始

隣人と玄関先の御慶かな 小森 広司

受話器ごとお辞儀してゐる初電話

除夜の鐘かき消すほどの風となり 横田 義男

塗椀に餅行儀よく大旦 寺田 好子

古民家の格子に搖るる餅の花 富田 澄江

連ね千す鱈は喉元貫かれ

年用意包丁研ぎに始まりぬ 富田 澄江

創業を知る神棚や初灯

招福の軸そのままに去年今年 小野木武守

岳人の頬に紅さす初明り

洋楽を琴が奏でる二日かな 足立 賢治

喰積のこころもとなき嵩となり

二日はや商談電話の虚笑ひ

寅の芽のはや立つてゐる岬村 渡辺 純枝

新元年はやも去年となりたり夢綴る

松尾をさむ

産土の太き神木初御空 森崎 義道

七種や子供太鼓の撥跳ねる

ブランチの後の珈琲去年今年 濱尾 千草

花眼にて「ミチクサ先生」読始

隣人と玄関先の御慶かな 小森 広司

受話器ごとお辞儀してゐる初電話

除夜の鐘かき消すほどの風となり 横田 義男

塗椀に餅行儀よく大旦 寺田 好子

古民家の格子に搖るる餅の花 富田 澄江

連ね千す鱈は喉元貫かれ

年用意包丁研ぎに始まりぬ 富田 澄江

創業を知る神棚や初灯

招福の軸そのままに去年今年 小野木武守

岳人の頬に紅さす初明り

洋楽を琴が奏でる二日かな 足立 賢治

喰積のこころもとなき嵩となり

二日はや商談電話の虚笑ひ

寅の芽のはや立つてゐる岬村 渡辺 純枝

新元年はやも去年となりたり夢綴る

松尾をさむ

産土の太き神木初御空 森崎 義道

七種や子供太鼓の撥跳ねる

ブランチの後の珈琲去年今年 濱尾 千草

花眼にて「ミチクサ先生」読始

隣人と玄関先の御慶かな 小森 広司

受話器ごとお辞儀してゐる初電話

除夜の鐘かき消すほどの風となり 横田 義男

塗椀に餅行儀よく大旦 寺田 好子

古民家の格子に搖るる餅の花 富田 澄江

連ね千す鱈は喉元貫かれ

年用意包丁研ぎに始まりぬ 富田 澄江

創業を知る神棚や初灯

招福の軸そのままに去年今年 小野木武守

岳人の頬に紅さす初明り

洋楽を琴が奏でる二日かな 足立 賢治

喰積のこころもとなき嵩となり

二日はや商談電話の虚笑ひ

寅の芽のはや立つてゐる岬村 渡辺 純枝

新元年はやも去年となりたり夢綴る

松尾をさむ

産土の太き神木初御空 森崎 義道

七種や子供太鼓の撥跳ねる

ブランチの後の珈琲去年今年 濱尾 千草

花眼にて「ミチクサ先生」読始

隣人と玄関先の御慶かな 小森 広司

受話器ごとお辞儀してゐる初電話

除夜の鐘かき消すほどの風となり 横田 義男

塗椀に餅行儀よく大旦 寺田 好子

古民家の格子に搖るる餅の花 富田 澄江

連ね千す鱈は喉元貫かれ

年用意包丁研ぎに始まりぬ 富田 澄江

創業を知る神棚や初灯

招福の軸そのままに去年今年 小野木武守

岳人の頬に紅さす初明り

洋楽を琴が奏でる二日かな 足立 賢治

喰積のこころもとなき嵩となり

二日はや商談電話の虚笑ひ

寅の芽のはや立つてゐる岬村 渡辺 純枝

新元年はやも去年となりたり夢綴る

松尾をさむ

産土の太き神木初御空 森崎 義道

七種や子供太鼓の撥跳ねる

ブランチの後の珈琲去年今年 濱尾 千草

花眼にて「ミチクサ先生」読始

隣人と玄関先の御慶かな 小森 広司

受話器ごとお辞儀してゐる初電話

除夜の鐘かき消すほどの風となり 横田 義男

塗椀に餅行儀よく大旦 寺田 好子

古民家の格子に搖るる餅の花 富田 澄江

連ね千す鱈は喉元貫かれ

年用意包丁研ぎに始まりぬ 富田 澄江

創業を知る神棚や初灯

招福の軸そのままに去年今年 小野木武守

岳人の頬に紅さす初明り

洋楽を琴が奏でる二日かな 足立 賢治

喰積のこころもとなき嵩となり

二日はや商談電話の虚笑ひ

寅の芽のはや立つてゐる岬村 渡辺 純枝

新元年はやも去年となりたり夢綴る

松尾をさむ

産土の太き神木初御空 森崎 義道

七種や子供太鼓の撥跳ねる

ブランチの後の珈琲去年今年 濱尾 千草

花眼にて「ミチクサ先生」読始

隣人と玄関先の御慶かな 小森 広司

受話器ごとお辞儀してゐる初電話

除夜の鐘かき消すほどの風となり 横田 義男

塗椀に餅行儀よく大旦 寺田 好子

古民家の格子に搖るる餅の花 富田 澄江

連ね千す鱈は喉元貫かれ

年用意包丁研ぎに始まりぬ 富田 澄江

創業を知る神棚や初灯

招福の軸そのままに去年今年 小野木武守

岳人の頬に紅さす初明り

洋楽を琴が奏でる二日かな 足立 賢治

喰積のこころもとなき嵩となり

二日はや商談電話の虚笑ひ

寅の芽のはや立つてゐる岬村 渡辺 純枝

俳人協会創立六十周年記念 東海俳句大会

この度の俳人協会創立六十周年記念東海俳句大会は、岐阜県・愛知県・三重県の三県に静岡県が加わり、東海四県にて開催された。

選句とともに「入選作品集」としてまとめられ、十二月に送付された。また、大会賞、秀逸賞及び選者特選賞の受賞者には賞品も送付された。

大會賞

鶴鳴くや泥著せ寝かす素鍛太刀

鳩鳴くや泥著せ寝かす素鍛太刀  
愛知 駒木 逸歩

愛知 市之瀬  
肇 分数を覚えたての子西瓜切る

秀逸賞（岐阜の方を抽出）

誤字にある温み手書きの年賀状

歳時記のいたみ繕ふ秋灯下

岐阜三轉二恩

八名から三二五句の投句があつた。  
これを二十三名の選者の方が厳正に選句された。岐阜からは、宮川典夫顧問、辻恵美子顧問、大野鶴士支部長、今津大天理事が選者として参加された。各選者が選んだ特選三句及び入選二十句に対し、特選句を二点、入選句を一点として集計、その結果、大会賞三句、秀逸賞三十二句が決定された。各選者の特選句、入

令和三年度 鶴供養会・鶴供養俳句大会  
(報告)

令和三年十月十七日（日）、鵜供養会・短冊流しが午前十時より午前十一時にかけて、岐阜市長良の靈天庵・長良川河畔にて行われた。主催者より「今年は、七月末から八月の、観光客が最も多い時期にコロナ禍による緊急事態宣言が発出され、この間、鵜飼開催を中止せざるを得ませんでした。また、鵜飼の働く役である鵜たちの健康管理に各鵜匠さんは相当の心遣いをされたということです。そのような中で、今年亡くなった鵜たちに心から哀悼の意

を表します。また本日の鶏供養会開催には、俳人協会岐阜県支部のご協力を得て、いることを申し添えます。」の挨拶があつた。今年の鶏飼中止日数は九十日となり、昨年の五十五日を超えて過去最多とのことである。

その後は、長良川に移動し、鶏の供養、そして、短冊流しが行われた。俳人協会岐阜県支部代表として宮川典夫顧問が出席された。

午後一時より「長良川うかいミュージアム」の会議室にて、「鶏供養俳句会」が開かれた。参加者十三名。

俳人協会岐阜県支部賞  
鶴供養を修し長良の秋惜しう  
宮川

俳人協会岐阜県支部賞  
鶴供養を修し長良の秋惜しむ  
宮川典夫  
能登 実  
鶴が逝けり夜夜は手繩の意に添ひて  
人賞句

(金津 丹羽 恵子記) 光汀



## 第二十一回 「芭蕉の道俳句大会」 募集案内

日本の色彩文化は古代中国の哲学思想に大きな影響を受けている。風土性が与える自然環境と歴史が与える人為環境の接点において感性の活動によって形成されていくものが文化であり、色彩は豊かな感性を育てる力を持っている。

日本の色彩文化を時代で区分すると、古墳・奈良・平安・鎌倉・室町・桃山・江戸・明治・大正・昭和時代に分けられる。なかでも平安時代はそれ以前の時代に強い影響を与えた古代中国文化から脱して、日本独自の和風文化が確立された時代である。

文化の領域では物語文学、和歌文学の誕生、また、宮廷衣服に見る「かさね」は、一色ではなく、複数の色の組み合わせによって、美しい色彩調和を生み出し、一方で若草、杜若、桜重、松重、桃重のような名称をつけ、季節感を楽しみながら、衣服の色彩調和を追い求めている。

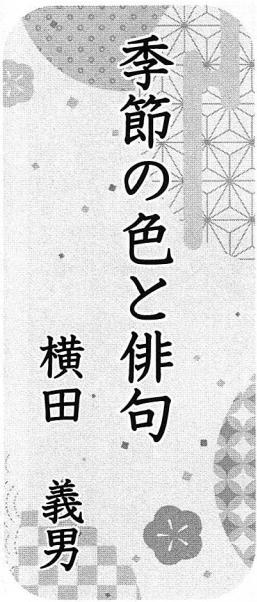
自然界の樹木や草花は、四季によってその色彩を変えてゆく。暑い寒いという肌で感じる感覚とは別に、夏や冬の訪れを、変化する色彩によって表現してくれる。美しく咲き乱れる花は、私たちを喜びの世界に導いてくれるし、抜けような青い空は、すがすがしい気分を与えてくれ、緑したたる樹木は、疲れた心を癒してくれる。このように自然の色は、まるで空気のような存在であり、無意識に私たちに季節を教えてくれる。四季を歳

日本は色鮮やかである。一月に松、二月に梅、三月に桜、四月に藤、五月に菖蒲、六月に牡丹、七月に萩、八月に薄、九月に菊、十月に紅葉、十一月に柳（雨）、十二月に桐の実を描いている。日本人の美意識に根ざした色彩感覚であり、この季節を意識した配色に日本の色はある。

俳句では春夏秋冬はさらに詳しく、春なら初春・仲春・晩春に分類される。また、一つの季語には言い換える季語（傍題）があり、一つ一つに独特の趣がある。季節感を具体化した季語により俳句は成り立っている。

原色のことと目立ちて室の花

横田 義男理事



横田 義男



スリランカにて  
左端 寺田 好子理事

## 俳句と共に

寺田 好子

俳句との出会いは今から三十六年前、中学校時代の恩師に勧められたことによる。

「日輪」に入会したものの勤めていたこともあって独学での十五年の後、句会に参加することとなつた。師や句友の作品から刺激を受け、そのうち吟行にも出かけるようになった。国内外を問わず誘い誘われ、見聞を広める機会が増えた。即作句に結びつかなくとも心の糧として得るものは大きかった。当時の吟行句を振り返ってみる。

初めて俳誌へ投稿した作品が活字になった時の感激は今でも覚えている。何とか上手になりたいと必死に頑張ったつもりでいたあの頃の氣負いばかりの時を抜け、今では俳句は自然体で向き合うものと思っていた。私のささやかな誇りは、この三十六年間一度も欠詠がないことで「継続が大切」との師のことばに支えられ、これからも俳句を楽しみたいと願っている。

春あけぼの指長き嬰をふはと抱く

入院を父母には告げず秋果つる

眠られぬままの喪の夜や冬灯

生家いま無人のままや蚯蚓鳴く

こうしてみると俳句は自分史であるとつくづく思う。

一方、師から

は「出かけられ

るうちに大いに

出かけなさい。

しかしうまく

ければ俳句が詠

めないという癖

はつけないよう

に」とのアドバイスを受けたこともあった。

俳句を始めてから今日まで、私自身の生活にも大きな変化があった。小学生と中学生だった子は今に五十代になろうとしている。そして、五人の孫のうち二人は社会人となった。同居していた夫の両親や実家の両親も帰らぬ人となってしまった。その折々に自分の思いを俳句に託してきた。

秋氣澄む故宮の龍に爪五本  
陰影のモンサンミッシェル星冷ゆる  
バザールや仏画も秋果も地に並べ  
基地近し琉球椿の真ぐれなる

謹 悼  
俳人協会岐阜県支部顧問の小鳥幸男  
先生（飛驒）が令和三年七月二日に  
お亡くなりになりました。  
心からご冥福をお祈りいたします。

## 県内結社の歴史・折々

「獅子吼」は令和四年八月号で一〇〇〇号を迎える。創刊は大正八年七月。それ以前から、以哉派と再和派とに分かれて活動していたが、創刊者森桂園道統は、以哉派の第二十八世である。

美濃を本拠として活動し、歴代の道統に美濃在住者が多いことから、美濃派とも呼ばれた。しかし、その時々の道統は美濃に留まらず、それぞれ越前、越後、山口、佐賀、大分など各地へ巡回を重ねる。

## 「獅子吼」一〇〇〇号

俳句と連句に関わって

奥山 ゆい



昭和四十八年には二派の合同が叶い、活動をより広げることとなる。その後は歴代の道統のもと、着々と俳諧の道を伝えられてきたと言えるだろう。結社の創設は三百年前とされ、第四十一世大野鶴士道統となつた今も俳諧の伝統を踏まえ、翁忌、支考忌などに伝承される作法による儀式的連句の正式俳諧を興行する。この作法は、岐阜市より重要無形民俗文化財に指定されている。それに加え、現代に根ざした俳句、連句の創作、研究を目指して精進している。

岐阜県の史跡に指定され、歴代道統の連塔を建立したり、改修を行つたりして整備を怠らないように心がけ、折に触れて活動の場として使用している。創刊以来百年余。「獅子吼」は順調に発行でき、た時ばかりではなかつた。季刊として始まつたが、昭和二十年の岐阜空襲によつて印刷所にあつた原稿が焼失してしまい、やむを得ず休刊。それでも一年後には復刊、まずは隔月で発行。当時の状況を想像すると、本当に頭が下がる思いである。そして昭和二十三年には月刊となり、令和の現在へとまつすぐ続いている。

一方、始祖二世の支考の庵であった獅子庵は、豌豆の花蝶よりも蝶の如

田中 啓子  
大野 鶴士  
安藤 美保  
岡本満智子  
瀬尾 千草

◆寒さ厳しき折、皆様方におかれましてはご自愛されます様、お祈り申し上げます。  
通り雨寒九の雨と覚えけり  
月今宵紅絹の中より銀の皿  
茹明黄身の片寄る秋思かな  
卓上に惑星三つ夜の桃

石の上に命とくとく蜥蜴の子  
逢坂を越えて近江は霧時雨  
浮いて来い悲しみの底蹴り上げて  
主なき実梅たわわに色付きぬ  
肩先を掠める雪の匂ひかな  
遣り場なき憤怒の形冬の雲  
コンセント抜いて小春の一日終ふ  
風音は落下の滝にまとひつく  
風に生き風に死したり鯉磯  
薄氷や水に太古の記憶あり  
座敷までまつはりつくや秋の蠅  
名和よちゑ

藤塚 旦子  
松尾 一歩  
宮本 光野  
村瀬 仁子  
大竹 花永  
奥山 ゆい  
各務 恵紅  
片桐 栄子  
澤井 国造  
瀬戸 斐香  
塚本 瞳  
名和よちゑ

◆第二十一回芭蕉の道俳句大会は、五月十四日に井越芳子先生をお迎えして開催されます。井越先生は、令和二年に来岐いただく予定でしたが、コロナ禍のためそれがかないませんでした。一度こそ開催できることを願っています。たくさんのご参加をお待ちしております。コロナ禍に於ける新生活の様式に知恵を出し合つていきたいものです。

編集後記

◇明けましておめでとうございます。本年も会報発行にあたり、ご理解ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

（藤田 小野木 舟戸 橋田）